



富士山大賞

二〇一六 受賞作品歌集

第一回富士山大賞を催したところ千首余りの応募を受けました。出品されました皆様に心より感謝申し上げます。

多くの力作が寄せられ、その一作一作からは富士山が私達の人生や生活に深い影響を成していることを一層強く感じました。

富士山の雄大な姿を仰ぎつつ日本の平安と世界平和を皆様と共に祈り続けたいと思います。

富士山大賞大会長 東久邇信彦

大賞

見えぬ富士を車窓はるかに感じつつ
身延線青き山あいを行く

大阪府 小西 美根子

準大賞

かじかみし指にて君へメール打つ
富士山頂にゆるぎなく立ち

東京都 岡田 貴美子

ともに見し富士の写真を貼りたれば
雲海となる母の病室

愛知県 西村 愛美

優秀賞

まっくらなライブカメラの向かうでも立つてるだらう富士の御山は

新潟県 有村 桔梗

富士山は背中を押してくれました職なきときも離職のときも

京都府 福地 秀雄

いつだって胸が高鳴る富士山を機中の小さき窓に見るとき

東京都 中澤 明子

人間はちっぽけなものだと五合目で言うな父さん富士山顔で

東京都 山下一路

春時雨降って白鳥富士に飛ぶ緑に染まれ霊峰の街

山梨県 丹沢 理子

富士山にこれから雪がつもったらもっときれいになれますように

山梨県 久保寺 美月

ここからは富士が見えなくさびしいとわたしがいるのに妻がつぶやく

埼玉県 丸山光

ダウンコート押しつ押しされつ忍耐のラッシュの車窓に一瞬の富士山

東京都 岡本和子

山小屋に身を寄せ眠る魚たちが雲海へ泳ぎ出す朝焼け

東京都 市岡和恵

みどりごはいま夢のなか笑むたびに富士のかたちのくちびる動く

静岡県 林充美

新しき真赤な帽子身に付けた地蔵と仰く朝焼の富士

山梨県 萬年三三

学生最優秀賞

精進湖で富士を横目に今日も漕ぐ慣れた風景この安心感

山梨県 渡邊森人

外国語短歌優秀賞

Un monde entre nous Moi ici et elle l・bas Soudain
elle t'est revenu Donne lui de ta force De ta hauteur
prend soin d'elle Je compte sur toi mont sacr・!

ぼくたちのあいだにある世界 ぼくはここに 彼女はあ
ちらに ふいに、彼女は君のもとに帰っていった 君の
力を彼女に与えて 君の高みから彼女を見守って 頼ん
だよ、聖なる山よ！ ※君=聖なる山（富士山）

フランス Cyril Pallus

外国語短歌佳作

Dans l'univers de quoi Peut-on danser comme ce soir
Vous comme un pudding Moi comme un balai dingue
Shizuoka en apesanteur

どんな世界でなら 今夜みたいに踊れるかしら プリンの
ようなあなた 素敵なお箒のようなわたし 無重力の静岡県

中山 かれん

佳作

登らんとつゆも思はず大根ぬき母仰ぎたり朝影の富士 鷺沼あかね

朝な朝な富士を拝みていし姑は願いどおりに突然逝きぬ 駒井春美

車窓からはじめて富士を見た甥は「あ、富士さま」と思わずさけぶ 佐藤待子

初雪の白際やかな朝なり富士北麓の紅葉ふかみて 渡邊久男

付箋にもキーホルダーやチャームにも姿を変えて富士は居ります 坂東典子

須走りを駆け下りたのは三つ編みの遠き夏の日富士見上げる 宮坂園子

生きることをやめることなどできないと光浴びつつ富士は鎮まる 谷川保子

擦れ違う息の荒さを聞き分けて崩壊しるき尾根路譲る 荒井玲子

一番と讃えられてはいるけれど友が恋しく泣くときもある 岩中幹夫

手の甲をひよいとつまんで「ふじさん」と世界を知らぬ子らは笑えり 熊谷友紀子

富士山に歓声あげる僕ら乗せ修学旅行車激しく傾く 佐々木眞

富士山に登ってくるといふ男うちわであおぎ送り出す夏 衛藤夏子
一切の無駄なきものの美しさ夜明け前なるシルエツト富士 遠藤絹代
銚子より富士を見んとぞ夕映えの屏風ヶ浦に老父の立つ 林 由実
富士山をお手本にして鍛へたる小さな足でキリマンジャロへ 橋本久子
稜線の濃くなりゆきし逢魔が時山は巨大な神となりゆく 赤坂伊希子
阿佐ヶ谷を過ぎて夕富士見える窓二分なれどもわたしの時間 斎藤洋子
富士見町に育ちて識りぬ佳きものは遠くより見る富士もあなたも 中山晴美
伯母死にて吾は来たりけり三島駅リルケの《山》に見下ろされつつ 藤原正樹
富士山のスマホケースの裏側で小石のごとくうごく親指 小野田光
一歩ごと吸ふより深く吐く息の白きをヘッドライトが灯す 竹内通代
夕焼けの富士が真紅に染まりだす自分の闘志を燃やし続ける 若月浩平
富士の山気高くそびえ立つなかに動物の声かすかに響く 渡邊颯人
富士山に雪がなくなり山小屋にあかりがつくと夏を感じる 渡辺歩那
ふじさんと平仮名にして書いてみる年寄になるかわいくなる 楠木悠平
この山を登ると見える朝の声私は知った今日の始まり 三浦 陸

慈母のごとき富士に抱かれあるときは嚴父のごとき富士を見上げる
橋本世紀男
朝夕に富士の高嶺を仰ぎ見て生きるしるべと古希のスタート
小笠原泰子
わが街の今日に明日に寄り添いてさやけくそびゆとこしえの富士
内藤富士子
退勤の路線橋から富士を見て妻と子の待つ家へと急ぐ
宮村明宏
ふる里の見慣れし山の名はおぼろ校歌唄えば蘇りけり
川井邦子
五合目の茶屋で殿下といただきし松茸そばの香味忘れじ
小原純子
幻の滝と変わりて流れゆき里の山葵田の畑に湧くなり
小高弘美
熊肉の放射線量高くして那須連峰は秘境を保つ
黒沢 竜
ふる里に帰れば迎える津軽富士りんご畑に抱かれ気高し
千葉む津
美しき裾野の広き赤城山その中にありてああ富士見村
岸恵美子
大富士の逆さになりて行水中子らがはしゃげば富士もほほえむ
三矢宗久
船員となりし息子の初船出大富士を背に漕ぎ出だしたり
西村 亮
出できたるばかりの月と富士山が東と西に見つめ合いたり
佐藤彰子
母見舞ふ度ごと励ましくれし富士遠く霞めり早暁の空
宮島秋子
稜線を蠢く万の灯あり富士山八合目の闇に消えたる
中嶋孝子

山頂に煙り無くとも活火山神のみぞ知る富士の爆発 清水 留

我がために近づきくれしと思ふほど裾野も長く富士の現る 田村千恵子

籠りるるわれに登山の土産とて富士五景なる便箋とどく 弓削香代子

棟梁の新築祝自らの写せし一葉ダイヤモンド富士 飯嶋伊津子

富士の山今日は一際輝やけり登りかなはぬ年となりしも 小川京一

家並みの切れ目をうめて現れる富士の白さや電車の窓に 原口萬幸

あの夏にペアで求めし富士登山記念ホルダーとひとりを暮す 依田邦恵

枕辺に亡夫と行きたる富士山の写真飾れる母の病室 角田好弘

赤富士がワインゼリーに見ゆる朝心ふるるん世界の遺産 高本智宏

富士山はどんな時でもいいメモリーあの頂きに立ったことあり 西澤康博

椀ぎたてのりんごを食みて登りたる岩木山頂初冠雪なり 小澤すみ子

木漏れ日に登山道ゆく我の背のタップンと水筒の啼く 後藤明美

冬日差す富士の裾野の湖の薄氷に鳥並び休らう 森田栄子

秋の日の父祖の眠りし菩提寺に初冠雪の富士を見ており 影山 博

べランダの涼風受けて遙かなる黒富士の灯の長きに見入る 堤 知美

赤禪の遠泳は二里波間より仰ぎし富士は今も瞼うち 近藤昭三
見慣れても飽きることなく今日も見る新幹線の富士との時間 山田佳永子
都留インター過ぎし頃よりフロントに立ち上りくる冬の富士山 小林 洋
汗うさき義手を外して眠る子よ登頂記念の杖を傍えに 山本栄子
ふじやまに登ることなく五十年この地に住みて夫を看取りし 花輪八重子
天地の交じらふところ風すさび富士山巔の剣ヶ峰にたつ 鈴木昭紀
ロックグラスの底の厚きに透ける山 甘酒映ゆる富士を飲み干す 茂木田鶴子
満願の西国札所めぐりきて帰路に会ひたる夕映えの富士 成島福子
出羽富士と言はれし鳥海仰ぎみてふるさと出でずふるさとに老ゆ 三浦弥生
笠雲を被ける富士に知る天気雨に備えて長靴を履く 原 寅夫
ご来光目指す数多の点すらんライトひと筋富士を登りぬ 芦川初江
いにしえに女人禁止の掟あり富士の古道に散る山桜 藤田幸子
天国が見えさうなほど澄みわたる富士山五合目にかあさんを呼ぶ 下村和枝
5合目は白い小海の先にいた左足からみちをひらいて 新井聡子

古い母の憧れ眺めし富士の山雲走る中五合目に立つ 辻本智江
北斎も広重も描く迫力の富士に日本のこころ宿れり 田辺新造
「どこ？」と問ふ吾に指差すその先のその高さこそ不二でありけり 戸矢一斗
澄む空に聳ゆる富士を見つめつつ翁呟く「ぢき春が来る」 山梨明彦
日本を離れて帰る機上から真白き富士に「ただいま」と云う 永井英男
富士山の東側を見ている西側を見るあなたを想って 安倍孝晴
三角の海苔の頂点ぎざぎざに切ってフジサン弁当に詰める 相原利沙
校庭の隅で見つめた富士山は泣き腫らした目に紅く滲んで 水野真由美
日本列島募る不安よ大丈夫こころのなかに富士山がある 萩原慎一郎
ふじさん、と叫んだ車窓その日から彼の姿を見ることはない 霧山じり子
富士山と背比べした伝説の故郷の山も碧くそびえる 清水静子
夏富士に大きな雲の首かざりなんだか幸せ明日は晴れかな 渡辺甲惟
富士山に登れば見えぬ富士山を目に浮かべつつ剣ヶ峰まで 松山紀子
富士見町一丁目一番地冠雪の富士山見える中央病院 市之瀬進

六本木駅地下七階より階のぼるいつかは富士に立つ日もあらむ 杉田加代子
三角の明かり取り窓見上げれば富士を思ひしル・コルビジュエ 橋本典子
108ピースパズルでつくる富士山の頂上ふたつのピースより成る 工藤吉生
シャッター音に目覚めてみれば富士山を撮る人々で賑わう車窓 エース
富士山が見えない席でもいいやんかあした東京タワーでさがそ 貝原 亮
抱きあげて夏のおわりの富士山を見せてやる子のいるうつつかな 中込有美
夕暮れの放送室の窓からのこんなにもくつきりと富士がいる 有原 汐
五合目を遙かに包む霧雨に濡れた睫毛をふるわせる馬 寺本百花
富士の山登ったことはまだないがどんな人でも分かる大きさ 原田喬平
きれいだなみずいろしろの富士山が日本の皆見下ろしている 杉本あみ
富士山は輝やいていてすばらしい遠くから見る富士の輝き 浅野慎太郎
登校時毎日見える富士山はいつもかわらずはく力がある 田辺諒士
富士山は普段はみなの人気ものだけど怒ると怖いんだ 小川優香
富士の山朝日にキラリ輝いて今年も一年頑張りましたよう 鈴木里奈

西にしずむ紅い太陽染めあげるいつも見ているやまなしの富士
橋 実 優
パール富士マイナーだけれど美しい帰り道ではなお美しい
原島美優
すずしそなたかいせたけがとくちようだうらやましいなふじさんいいな
渡邊望愛
富士山を眺める場所は山でありその山もまた眺め美し
石原なつみ
偉大なる富士の麓に生まれ育ち大きな愛に抱かれる日々
小澤夏姫
目の前に高くそびえる富士山はずしりとかまえて僕を見下ろす
小俣真星
建物や山の間顔を出し今の季節を教えてくれる
笠井凱貴
富士山に登ってみたいいつの日かてっぺんからの景色が見たい
志村将斗
いつの日も変わらず見つめる富士の山「それ」が来る日は知る由もない
吉澤老一朗
土の音風と木の音鳥の音自然の声があふれでている
石井菜月
御来光登る疲れがつのるときもう一步だと背中をおした
加藤葉月
富士のもと未来へ向かって歩きだす大きな人になっていきたいな
上嶋菜々夏
遠くからいつも見ている富士山をいつかかならず登ってみたいな
原田 遼
暗い空小さな富士が浮かんでるまた一日が始まる合図
石野真歩

山小屋の灯る光があちこちに富士の山を彩っている
小幡 茉那
清流を生む霊峰の雪化粧湖面に写る富士が輝く
谷内 絢音
そびえたつ南の空の富士の山どんなときでも見守っている
宮下 捺希
富士山は雨降る前に傘さすのみんなそれ見て傘もつてくの
小山田 圭汰
樹海にひろがる風の葉を揺らす音カサカサ私に何かを伝える
小山田 磨依
雲海のその優しさに包まれて朝の光を希望に変える
宮下 愛永
そびえたつ富士のふもとですくすくとさあみななろう最高峰に
和泉 昇大
富士の道くるしいときも一歩ずつ踏み越えていけ頂目指し
堀池 拓達
朝早く富士山見たらくれないに朝日に照らされ燃えあがりけり
宮下 凌
富士の山子のとき見上げ今はみず変わらずそこにあるものなのに
橋本 さら
山頂で友達と見た大空は心の霧を晴らしてくれた
工藤 桃華
山林を飛び交い舞うよクロアゲハ今日も自慢の黒ドレス着て
又木 楽楽
墓参り登る山道百二段祖母への挨拶七月七日
高山 虎之助
山道を抜けるとそこには夏景色体から汗がにじみ出てくる
雨宮 竜晟

【選者】

選考委員長 岡井 隆（日本芸術院会員、宮内庁和歌御用掛）
選考委員 三枝昂之（山梨県立文学館館長、日本歌人クラブ会長）
穂村 弘（日本経済新聞歌壇選者）
東 直子（東京新聞歌壇選者、早稲田大学教授）

【開催団体】

富士山大賞実行委員会
NPO法人富士山自然文化情報センター
NPO法人富士山クラブ
世界連邦文化教育推進協議会
全国富士講睦会
一般財団法人 徳大寺文庫

【後援】

外務省 経済産業省 環境省 富士山世界遺産国民会議

【映像協力】

富士山世界遺産センター 山梨県 ロッキ―田中

【式典会場】

平成二十八年十一月十二日 於 帝国ホテル（富士の間）